

2021. 4. 25. 主日礼拝説教

聖書：ヨナ書 3章 6-10節

『悔い改めがもたらすもの』

▼ヨナ書はあまり旧約聖書に馴染みのない方でも比較的良好に知られている物語かと思えます。それはおそらく単純明快なストーリー構成ゆえのことでしょう。いわゆる「こども聖書物語」に準じるほど一度聞いた者に印象的なイメージを残す、他の旧約聖書中には類例のない特異なスタイルなのです。

▼成立年代は捕囚期後からヘレニズム時代あたりとされています。偏狭なナショナリズムに固執するがゆえにバビロンによって沿革、文化、宗教性等がほとんど破壊され、捕囚から解放された人々が手探りで新しい「神」との契約を模索し続けた時代とヘレニズムというこれまた全く新しい価値観の急激な流入において、イスラエルが自らのアイデンティティーを何処に据え置くかが議された時代背景なのです。もう少し分かり易くいえば、自分たちばかりが救いの対象などでは決してなく、異邦人にも変わらぬ神の愛が及ぶという新約聖書的な内実を有しているのです。更にそれは「悔い改める」という新たな信仰理解、つまりイスラエルの自己理解への試みが成されるのです。そのことは今を生きるわたしたちに何を伝えようとするのでしょうか。

▼物語はヨナ（鳩の意）がニネベ（アッシリアの大都市）宣教の命に背いて逃げ出すことから始まります。嵐の海上の 1章 6節には「あなたの神を呼べ」、つまり祈れと要請されますが、それさえもヨナは拒否して 12節で「海に放り込め」と言い放ちます。結果は大魚の腹の中で三日三晩という時を過ごすこととなります。ここにきてようようにしてヨナは「自分の命」と向き合い、初めて感謝の祈りを捧げます。大魚はヨナを陸地に吐き出します（章）。

▼ヨナは主の命令通りにニネベの都に行き、人々の行いゆえの滅亡を預言します。ニネベの人々はヨナの想定通り、こぞって主に帰依しますが、ヨナにはそれがたとえようもなく不満なのです。そんなヨナを神は諭すのです。

▼わたしたちは悔い改めると言えば「こんなことなら～しとけば良かった」という具合に考えがちです。けれどもこれは単なる「後悔」にしか過ぎません。ヨナ書に用いられる「悔い改める」という言葉はシュエヴという語が使われています。この動詞の意味は「Uターンする」、つまり出発点に戻るといふことなのです。ヨナが船で逃走したように、大きく寄り道して挫折や絶望を人生の途上で経験し、しかし、もう一度生き直すことへの暖かいまなざしが、この自分にも備えられていることへの気づきこそが「悔い改める」という作業なのではないでしょうか。

▼さらに、悔い改めとは大魚の腹の中のヨナのように「自分の命」との向き合いなのです。自分の命は自分の好き勝手に使えばいいということではありません。だれと分かち合い得るのかという課題なのです。けれども、ヨナはニネベの人々の回心を受け入れられませんでした。そこで神は彼に諭しを与えます。それは悔い改めと自分の命との向き合いを経た者は、他者の痛みを受け入れることの出来る者として成長するという事なのです。つまり、「自分の命」のように「他者の命」との向き合いがかけがえなく大切な事柄として初めて受け入れられるということなのです。これが悔い改めのもたらす豊かさであり、旧約聖書を越えて新約聖書に至る律法の再解釈—福音の息吹なのではないでしょうか。わたしたちも信仰の原点に立ち返ることを許された者として、他者と共に生きることを今一度見直したいと願います。